ハーモニー

Harmony

第99号　2026年2月18日発行

一般社団法人

日本養護教諭教育学会

General Incorporated Associations
Japanese Association of *Yogo* Teacher Education

（一社）日本養護教諭教育学会

事務局：〒162-0801
東京都新宿区山吹町358-5
アカデミーセンター
TEL　03-6824-9398
FAX　03-5227-8631
振替口座：00880-8-86414
jayte-post@as.bunken.co.jp

目　　次

第33回学術集会の報告とお礼 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第33回学術集会を振り返って<参加者アンケート結果> ・・2
第33回学術集会に参加して（会員の声①②③）・・3
第34回学術集会のご案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
会員交流⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
トピックス①　養護教諭の複数配置基準の見直しについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
トピックス②　教員養成部会における「養護教諭・栄養教諭作業部会」の設置について・・・・・・・・・・・・6
2024年度「研究助成金研究」の進捗状況 ・・・・・・・・・6
「養護学の構築にむけたプロジェクト」（報告）・・・・・・・8
理事会の議事について（報告）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
事務局からのお知らせ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第33回学術集会の報告とお礼

学会長　大川 尚子（京都女子大学）

2025年12月13日（土）、14日（日）に京都女子大学（京都市）にて、日本養護教諭教育学会第33回学術集会を開催いたしました。昨年に引き続き、対面とオンラインのハイブリッド形式での開催でした。全国各地からお申し込みをいただき、対面・オンラインを合わせて300名以上の方にご参加いただきました。

メインテーマ「子どもたちのウェルビーイングを支える養護教諭の役割」は、昨年の茨城で開催された第32回学術集会のプレコングレス「今、問われている子どもたちのウェルビーイングを考えよう」に続き、それを支えるための養護教諭の役割について考えたいと企画しました。

1日目の特別講演は、「プロ囲碁棋士に学ぶメンタルコントロール術」というテーマで、日本棋院関西総本部所属の囲碁棋士で、2018年に国民栄誉賞を受賞された井山裕太氏九段よりオンデマンドでご講演いただきました。

教育講演は、「教育の場と子どものウェルビーイング」というテーマで、京都大学人と社会の未来研究院教授、文部科学省中央教育審議会委員の内田由紀子氏にご講演いただきました。

そして、「子どもたちのウェルビーイングを支える養護教諭の役割」を考えるために、「学校の福祉的役割に注目して」という副題でシンポジウムを企画しました。シンポジストに養護教諭が含まれていない点についてはご意見をいただきましたが、まずは、学校の福祉的役割について多職種の方々からご提言いただくことで、養護教諭の役割を考える機会にしたいと思ったしだいです。その概要は学会誌で報告いたしますので、お目通しいただければ幸いです。

2日目は、午前中に一般演題（口演21題、ポスター8題）や研究助成金研究発表2題を4会場で実施しました。一般演題区分でみると、養護実践が9題、現職教育が4題、養成教育が6題、その他が10題となりました。会場とオンラインで質疑があり、活発な協議が行われました。ご発表くださった皆様に感謝申し上げますとともに、それぞれの研究や実践を是非とも学会誌に投稿していただき、参加できなかった会員の方々とも共有していただきたいと思います。

2日目の一般演題発表、研究助成金研究発表、ランチョンセミナー、ワークショップに至るまで、ウェルビーイングをキーワードに日々の実践を振り返るプログラムを構成することができたと考えています。また、どの会場も熱気にあふれ、充実した2日間を過ごしていただけたと思っております。

最後になりましたが、本学術集会の開催にあたり、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府医師会、京都府歯科医師会、京都府薬剤師会、京都女子大学からのご後援をいただきました。また、私どもの意志にご賛同いただき、多くの団体・企業様から協賛をいただくなどのご支援のもと、開催できましたことに深く感謝申し上げます。

開催にあたり、後藤理事長をはじめ理事・監事の皆様には多大なご助言を賜りました。また、企画の立ち上げから準備、当日と支えていただいた実行委員、協力委員、学生スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

＜学会長基調講演の様子＞

第33回学術集会を振り返って

実行委員長　髙田恵美子（畿央大学）

本学術集会は、関西では7年ぶり5回目となる、古都・京都の地では初の開催となりました。実行委員11名および協力委員14名は、京都の「一期一会」のおもてなしと「利休七則」の教えを大切に、「オール関西」の絆で準備を重ねてまいりました。準備期間中はオンライン会議が中心となりましたが、大川学会長の豊富な運営経験に導かれ、委員一同、安心してそれぞれの役割を全うすることができました。また、京都女子大学心理共生学部との共催をはじめ、講師、関係諸団体、そして50名の学生スタッフの皆様に、多大なるご支援を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

会期中、学生、養護教諭、大学教員、そして養護教諭を支える専門家の方々が会場の至る所で熱心に語り合う姿を拝見し、本職域の発展に向けた大きな希望と可能性を実感いたしました。また、参加者の皆様から温かい労いのお言葉を頂戴しましたことも、運営の大きな支えとなりました。

一方で、1日目、2日目の会場・展示変更に関する案内不足や、休憩室の未設置、ワークショップの定員管理、一部会場でのオンライン接続トラブルなど、ご参加いただいた皆様にご不便とご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。これらの反省点は、次年度以降の開催に向けた貴重な課題として確実に引き継いでまいります。

全国各地から遥々京都までお越しいただいた皆様、ならびにオンラインでご参加いただいた皆様に、改めて心より御礼申し上げます。

＜参加者アンケートの結果＞

アンケートにご協力いただきありがとうございました。110名の方からご回答をいただきました。結果の概要と貴重なご意見を抜粋してご報告いたします。

1．参加方法（四捨五入のため合計は100%にならない）
　会場75.5%、オンライン19.1%、
　会場とオンライン5.5%

2．会員の種別
　会員70.9%、会員外29.1%

3．学術集会を知った手段（複数回答にて回答数で記載）
　いつも参加している36人、学会ホームページ37人、
　知人の紹介26人、ハーモニー37人、チラシ21人、
　雑誌等の記事9人　他

4．参加した感想
　大変良かった74.5%、良かった25.5%

5．興味を持った内容（複数回答にて回答数で記載）
　学会長基調講演65人、特別講演48人、
　教育講演80人、シンポジウム67人、
　一般演題（口演発表）73人、（ポスター発表）40人、
　学会助成金研究発表18人、
　「養護学の構築にむけたプロジェクト」報告22人
　ランチョンセミナー63人、ワークショップ47人

6．シンポジウムについて（自由記述）
- 今回のシンポジウムで、社会に出ていくまでに関係機関とつなぐこと、課題解決策を協働する、本人が自走できる形にデザインし体感させ練習することが養護教諭の役割だと再認識した。
- 養護教諭だからこそのケア、養護教諭から教職員に浸透させていくことができるケアがあることも改めて感じ、考えさせられる機会となった。
- 現場の養護教諭の動きとして実践可能(実現可能性)の視点がもっとあればよかった。
- 養護教諭の視点、立場からの提言があれば良かった。

7．シンポジウム以外について（自由記述）
- 学会長基調講演がとてもよかった。日常に落とし込み実践し、養護教諭の実践研究が展開できればと思う。
- 特別講演は、温かな会話の中にも養護教諭として子どもを支えるための大切な指針が語られ、感銘を受けた。
- 教育講演において、幸せは個人の努力のみで獲得するものではなく、集団の中で追求するといった理論から、私たち養護教諭には社会、集団、個人を繋ぐ、「つなぎ手」としての役割がいっそう求められていることを改めて認識した。
- 研究の発表をたくさん聞けて、研究の面白さ、奥深さを知った。全国で養護教諭が活躍していることを知り刺激になった。
- 「プレコングレス」と「プロジェクト報告」は、学会として、継続的に取り組む必要性を感じる内容であった。
- 特に研究助成に関心があり参加した。中教審のWGのこともあり、今後のさらなる成果に期待している。
- ランチョンセミナーの成長曲線の講演は、具体的な

事例を用いた説明で、気になったら早く専門医に繋げることが大切だと学んだ。
- ランチョンセミナーの土生川先生のご講演で、教育と医療をつなげることが子どものウェルビーイングにつながると再確認した。
- ニコさんのワークショップは、まさに明日から役立つもので、アナログの世界を大切にしつつも、AIをはじめ、新しい世界も上手に取り入れていく必要を感じた。
- 爪活は楽しく、子どもの自己肯定感を高めることはもちろん、自分自身も生かしていきたいと思った。

8．その他（自由記述）
- オンライン参加できるのが大変ありがたかった。
- 普段馴染みのない話し方（関西特有の話し方）やイントネーションが新鮮で、集中力が途切れずに最後まで聞くことができた。
- 情報交換会で忌憚のない話を伺うことができた。
- 展示ブースが文化祭のようでとても面白かった。出展者の方々とたくさんコミュニケーションもとれた。
- 全体を通して、スライドのレジュメが欲しかった。抄録だけではメモが追いつかなかった。

◇◇◇

第33回学術集会に参加して（会員の声①）

田島　典夫（愛知県小牧市消防本部・尾張中北消防指令センター）

この度、日本養護教諭教育学会学術集会に初めて参加し、発表の機会もいただきました。これまで救急関連の学会での発表経験はありましたが、学校関係の学会は初めてであり、違った緊張感がありました。

私は、救急救命士として、これまで救急現場での活動に携わるとともに、応急手当の普及啓発にも長年取り組んできました。今回は一次救命処置に関する教育の実践とその効果について発表させていただき、発表後には、同様の講習事例のご紹介や、ガイドライン改定と10年間のデータの関係性についてご質問をいただくなど、新たな気づきを得ることができました。

また、他の演題では、救急処置における心理的な側面や、健康上配慮を必要とする児童への対応など、救急に関連する発表を聴講しましたが、その他も含め取り扱う内容は多岐にわたっており、養護教諭の皆様の業務の幅広さと、その判断や対応の難しさを改めて実感しました。学校運営には欠かせない重要な役割であり、このような学術集会を通じて、より深く研究していくことの重要性も強く感じました。

学校内における緊急時の対応は、消防職員が一方的に知識や技術を提供するものではなく、学校と消防・救急が相互に連携し、共に取り組むべきと考えています。今後も引き続き、理想的な救命講習のあり方について、特に学校現場における効果的な対応について検討を続けていきたいと思います。

最後になりましたが、養護教諭でも学校関係者でもない、消防職員（救急救命士）である私に、このような貴重な学びの場を提供していただいた大川学会長をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今後も機会がありましたら発表したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第33回学術集会に参加して（会員の声②）

大西　瞳（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）

私は大学院の博士課程で研究をしながら、京都府の学校で養護教諭をしており、この度の学術集会に初めて参加しました。学術集会に参加して、養護教諭の歴史とエネルギーを実感することができました。

これらはまず、参加されている皆様から体感することができました。学術集会中は、多くの養護教諭や養護教諭養成に携わっておられる先生方にお会いしました。本や資料でお名前を拝見したことがある先生方にもお会いすることができました。先生方の養護教諭という職業と実践に対する想いをお話しされているご様子から、養護教諭の深い歴史や願いを味わったような気がしました。

また、口演、ポスター発表からも、歴史とエネルギーを感じることができました。保健室登校や食、性に関する指導といった、私が養護教諭を始めたころから関心のあったテーマに加え､認知行動療法やヘルスコミュニケーション、レジリエンスといった専門的な知見を応用した実践、保健室の福祉的な役割やヤングケアラー、LGBTQ＋といった現代的な課題、生成AIやデジタル保健室などの最新の実践方策に触れることができました。

これらを通して感じたことは、養護教諭として私が大切にすべきことは、いつの時代も変わらず、子どもたちのウェルビーイングだったのではないかということでした。子どもたちを取り巻く環境や心身の健康課題、課題への方策や養護教諭の役割は時代とともに変化しますが、子どもたちのウェルビーイングのために何が必要かを考えて実践することが、いつの時代も大切なことであり、私にとってこの学術集会はその実践のためのエネルギーに触れることのできる場所であったように思いました。

最後に、このような素晴らしい学術集会の運営にご尽力いただきました、今学術集会の学会長である京都女子大学大川尚子先生をはじめ、運営委員の皆様に心から感謝申し上げます。

第33回学術集会に参加して（会員の声③）

杉田　彩恵（京都女子大学学生）

日本養護教諭教育学会第33回学術集会の開催にあたりご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。

今回のメインテーマが「子どもたちのウェルビーイングを支える養護教諭の役割」であったため、子どもたちにとってのウェルビーイングとは何かを念頭に置きながら2日間発表を聞かせていただきました。

1日目は、特別講演やシンポジウムなどを拝聴しました。この中で特に印象に残っていることは、「子どもたちのウェルビーイングのためには、教職員一人一人のウェルビーイングが確保されていることが不可欠である」ということです。支援する側の状態が、教育の質や子どもたちの理解にも影響すると思います。今後は「子ども中心」だけでなく、「支える大人の環境づくり」も考えていく必要性を強く感じました。

2日目は、僭越ながらポスター発表をさせていただきました。本研究では、指導教員をはじめ、多くの学生にご協力いただきデータの収集・分析を進めてまいりました。発表は非常に緊張しましたが、質疑応答の際に先生方から新たな視点のご助言をいただき、研究の奥深さを知るとともに、研究テーマが珍しいと興味を持ってくださったことを大変嬉しく思いました。さらに、多くの発表をお聞きして、多職種連携の重要性や、養護教諭と地域性について、求められる判断力や対応力など様々な観点からの研究で、自身の研究に対する視野を広げる貴重な機会になりました。これから教育の第一線で活躍できる養護教諭になれるよう、多くのことを吸収し、努力を重ねてまいります。

初めて日本養護教諭教育学会に参加し、たくさんの学びが得られた充実した時間になりました。学部時代での参加と、現場に出て経験を積んでからの参加とではまた違う学びがあると実感したので、機会があれば今後も参加させていただきたいと思います。

第34回学術集会のご案内

学会長　石田 妙美（東海学園大学）

一般社団法人日本養護教諭教育学会の第34回学術集会を愛知県で開催いたします。愛知県には、今年の大河ドラマで度々紹介されているとおり、戦国武将である三英傑のゆかりの地が数多くあります。また、古くから繊維産業や窯業、伝統工芸品などのモノづくりが盛んで、1977年からは工業製品出荷額で日本一を続けるモノづくり王国となり、特に自動車や航空機、工作機械などの重化学工業が盛んです。

そこで、モノづくり愛知の特性を意識した開催にしようと考えて、メインテーマは「養護教諭の未来をデザインする－Society 5.0時代にいきる子どもたちのために－」としました。

開催日は2026年11月28日(土)・29日(日)、会場は東海学園大学名古屋キャンパスです。

名古屋駅からのアクセスは、地下鉄東山線で「伏見」(次駅・3分）に行き、鶴舞線に乗り換えて「原」(11駅目・23分）で下車します。または、地下鉄桜通線（徳重行）で「御器所」(8駅目・15分）に行き、鶴舞線に乗り換えて「原」(6駅目12分）で下車します。

原駅から大学までは徒歩15分、または市バス（何行きでも可）に乗り換えて「平針南住宅」(3つ目の停留所）で下車し、徒歩約3分です。

例えば新幹線利用ですと、名古屋駅に降りてから大学までは50分程かかりますことをご容赦ください。

開催形式は、例年どおり、対面とオンラインを併用しますが、一般演題の発表者は現地会場参加となります。会長講演、特別講演、シンポジウム、一般演題発表（口頭発表・ポスター発表)、ワークショップ、プレコングレス、ランチョンセミナー、情報交換会の詳細については学会HPにて随時掲載いたします。

皆様のご参加を心よりお待ちしています。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 【会員交流⑦】 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

不易と流行のあいだで専門性を育む

～研究と実践の往還から見えてくる養護教諭の魅力～

土屋 隆子（村山市立楯岡中学校）

朝の保健室には、一日の始まりを静かに整える時間があります。校舎に子どもたちの声が響く前、私は窓を大きく開け、新鮮な朝の空気を取り入れることを日課にしてきました。このひとときは、これから始まる一日を見守るための、私自身の準備の時間でもあります。やがて保健室にはけがや体調不良を訴える子ども、言葉にしきれない不安を抱えて訪れる子どもたちが来室します。そうした一人ひとりの訴えや沈黙に丁寧に向き合い、背景にある生活や心身の状態を捉えようとする日常的な関わりの蓄積が、養護教諭としての専門性を問い続ける私の基盤になっています。

これまでを振り返ると、養護教諭の職務には時代が移ろおうとも決して揺らぐことのない「不易」と、社会や子どもを取り巻く環境の変化に応じて柔軟に更新される「流行」が共存していることを実感します。子どもの心身の健康保持増進に関わり、その成長を全人的に支える根本的な使命は共通していますが、そのアプローチや具現化の方法を常に模索し続けてきました。

その真価を強く意識させられた出来事として、新型コロナウイルス感染症のパンデミックは記憶に新しいところです。未知のウイルスへの恐怖が社会を覆う中、学校現場にはかつてない高度で継続的な健康管理と、徹底した感染予防対策が求められました。混乱と不安が渦巻く最前線において、養護教諭の専門性がこれほどまでに問

われた時はなかったのではないでしょうか。疾病の未然防止を視点とする「予防」、子ども一人ひとりの行動変容を促す「教育」、そして教職員・家庭・医療機関をつなぐ「調整」等の多岐にわたる役割が極めて高いレベルで期待され、養護教諭はその活動に力を発揮しました。換気や消毒、健康観察、生活リズムの指導等、私たちが日常的に地道に行ってきた保健管理・保健教育は、「新しい生活様式」として再構成され、学校教育の枠を超えて社会全体の規範として共有されました。歴史的ともいえる経験を通じて、養護教諭が長年にわたり蓄積してきた実践知が、単に学校を支えるだけでなく、広く人々の健康を保持増進する公衆衛生の基盤であることが、社会的にも再認識されたと感じます。

そして、どんな状況においても大切にしてきた「不易」とは、子ども一人ひとりの存在を丸ごと受け止め、その心身の声に謙虚に耳を傾ける姿勢です。子どもたちは常に、自らを安心して委ねることのできる大人の存在を求めています。保健室は、教室では語られにくい思いや、他者には示しにくい脆さが自然に表出される場であり、そうした子どもの内面に触れられる場です。養護教諭は、子どもの表情や仕草といった非言語的なサインを手がかりにアセスメントし、尊重的な関わりと調整を通して回復を支援してきました。また、関係者が共通理解のもと支援できるよう、実践をつなぎ直す役割も求められてきました。「報告・連絡・相談（ホウレンソウ）」は、子どもの安全・安心を守るチーム支援の礎です。保健室は個別支援の場であると同時に、組織的な支援体制を再構築する「戦略的拠点」の役割を担い続けてきたことも不易であり、今日の「チーム学校」の理念につながっています。

一方で、「流行」とは、子どもを取り巻く社会環境の変化に伴い、養護教諭に求められる視座が拡張してきた歴史でもあります。性教育、薬物乱用に関する課題、心身症や不登校への対応、夜型化する生活習慣の課題、メディアリテラシー、発達特性の理解、医療的ケア、家庭・福祉との連携、そしてICTの活用等、実践の歴史を振り返ると、その時々に切実な課題があり、その解決や対応に向けて試行錯誤を繰り返してきました。養護教諭の専門性とは、まさに「不易」という錨（いかり）を下ろしつつ、「流行」という波を捉え、その往還の実践の中で培われ磨き上げられてきたのだと考えます。

多様性を認め合う社会になった昨今、子どもの背景や価値観、抱える課題が複雑化する中で、私たちもまた学び続け、しなやかに変容していくことが求められています。日々の実践に真摯に向き合い、不透明な未来の中にあっても子どもの回復と成長を信じ、探究心を持って学び続ける姿勢が、専門性を更新し続ける原動力となります。

保健室を起点として、個別支援からチーム支援へ、さらに学校内から地域社会へ、そしてICTの活用などを通して実践を広げていく先には、養護教諭の更なる発展の可能性が見えます。その取組にはまた試行錯誤の連続が予測されますが、だからこそ養護教諭の仕事には、学び続ける楽しさと、専門職として成長し続ける喜びがあるのだと信じます。養護教諭が子どもたちを静かに照らし続ける希望に満ちた専門職としてさらに輝き続けていくことを願ってやみません。

本学会は、養護教諭の「実践と研究の往還」を支え、「不易」と「流行」を結びつけながら、個々の実践を普遍的な専門性へと高めていく場です。保健室での関わりは個別性が高く、ともすれば貴重な知見が個人の「暗黙知」として埋もれてしまいがちです。だからこそ、日々の実践を記録し、省察を通して構造化することで、実践は客観的な研究の対象へと昇華されます。研究的視点によって裏打ちされた実践知は、経験則の枠を超え、共有可能な「専門的根拠（エビデンス）」に発展します。本学会が、養護教諭の学びと成長を支える共同体として、その役割を力強く果たし続けていくことを心より祈念いたします。

トピックス

12月末及び1月末に、養護教諭の今後にかかわる動きがありましたので、下記にご紹介いたします。

理事長　後藤ひとみ

① 養護教諭の複数配置基準の見直しについて

次年度の政府予算案が昨年12月26日に閣議決定されました。全ての子どもたちへのよりよい教育の実現に向け、学校の働き方改革を加速化し、教職の魅力を向上させ、教師として優れた人材を確保するため、約40年ぶりとなる公立中学校の学級編成標準の引き下げが行われます。これにより、中学校35人学級を実現するとともに、養護教諭の配置充実、学校事務体制の機能強化などに係る令和8年度から令和10年度に実現する新たな「定数改善計画」が策定されました。

この計画では、教職員定数は7,596人（3年間の改善総数は24,605人）の増員となり、そのうち養護教諭の配置では104人（3年間で310人）が増員となります。算定根拠として養護教諭の複数配置基準の見直しがあり、小学校は851人が801人に、中学校は801人が751人になる予定です。このような見直しは久々の改善事項になりますが、昨年8月29日に文部科学省から出された概算要求では「いじめ・不登校対応等の体制整備」の一つとして、養護教諭の複数配置基準を小・中いずれも現行より100人引き下げるという案でしたので、その半分に縮減されたこと、合わせて全校配置の要望が撤回されたことは残念な結果と言えます。

理由として、概算要求時にあった「いじめ・不登校対応等の体制整備」という表記が「定数改善計画」では明示されなくなり、一方で小・中学校における生徒指導担当教師の配置が650人（3年間で2,940人）積算された

ことが関係しているのかもしれませんが確認は出来ていません。

なお、教師の処遇改善は1.36億円の要求を超えて1.61億円になり、教職調整額の改善等によって学びの専門職である教師にふさわしい処遇が緩やかに進んでいくようです。養護教諭の複数配置の拡充と合わせて、教職の処遇改善にも注視していきたいと思います。

② 教員養成部会における「養護教諭・栄養教諭作業部会」の設置について

○設置の背景

令和6年12月25日に中央教育審議会（中教審と略）に対して「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」が諮問されました。

諮問理由には、近年における先端技術の高度化や社会構造の変化、子どもたちの多様化等の学校が直面する様々な課題の状況をふまえて、令和3年1月の中教審答申、令和4年12月の中教審答申、令和6年8月の中教審答申の方向性に則って、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速する必要があることが述べられています。

このような観点から主な検討事項として、①社会の変化や学習指導要領の改訂等も見据えた教職課程の在り方、②教師の質を維持・向上させるための採用・研修の在り方、③多様な専門性や背景を有する社会人等が教職へ参入しやすくなるような制度の在り方が挙げられ、中教審初等中等教育分科会教員養成部会で議論されてきました。

○教員養成部会における作業部会の設置

教員養成部会は、令和7年10月15日に上記①～③に関する論点と議論の方向性を公表しており、これに先んじて9月19日には「教職課程・免許・大学院課程ワーキンググループ等の設置について」を決定し、この中で、社会の変化や学習指導要領の改訂等も見据えた教職課程の在り方について、より具体的かつ専門的見地から審議を行うため、ワーキンググループのもとに5つの作業部会を置くことにしました。

養護教諭については、「養護教諭・栄養教諭作業部会」が設置され、教員免許状の在り方、養成・採用・研修の在り方、これらに関連する事項について検討することになりました。

○「養護教諭・栄養教諭作業部会」の議事概要

第1回の作業部会は、本年1月29日（木）15：30～17:30に開催され、委員10名が参集して森田真樹氏（立命館大学）を主査に選任しました。本学会の関係では、日本養護教諭関係団体連絡会会長である遠藤伸子氏（女子栄養大学、日本養護教諭養成大学協議会会長）が委員として参加していますので、連絡会の代表者会議を通じて共有した情報は、会員の皆様に適宜お知らせしたいと思います。

ここでは、配布資料6「養護教諭・栄養教諭の養成・採用・研修に関する現状・課題と検討事項」から、本作業部会の検討に深く関わる内容を紹介いたします。

＊養護教諭は他の教諭とは異なる専門性に基づき、健康面の指導だけではなく、生徒指導面でも大きな役割を担っており、心理・福祉等の更なる資質能力の向上に取り組むことが求められている。

＊養護教諭・栄養教諭の教職課程は、中学校をベースに、養護（栄養に係る教育）及び教職に関する科目に含めることが必要な事項及び単位数を見直す。

＊免許取得に必要な事項・科目を「教科（領域）等の指導法」・「教育及び幼児、児童又は生徒の理解」に再構成するに際して、それぞれどのように区分を行うか。また、新たな教育課題に対応する事項について、盛り込むべきか。

＊事項名称や単位数の詳細は学校種ごと（幼稚園、小学校、中学校・高等学校、養護教諭・栄養教諭、特別支援学校）の作業部会で更に検討を進めるが、現行の一種免許状と二種免許状は、基礎的な免許状として統合を図ることとする。

＊他の職種の免許状と比して、養護に関する科目の内容及び単位数については、大学側の裁量が狭い。

＊養護教諭については、主に教員養成系、看護系、心理系、福祉系等の学部で養成が行われており、それぞれ強み専門性と考えられるのではないか。

以上のように、教職課程の見直しイメージ、教育職員免許法施行規則の見直しイメージ、強み専門性イメージが進んでいることから、「中教審の初等中等教育分科会の教員養成部会の中に置かれた教職課程・免許・大学院課程ワーキンググループのもとに栄養教諭とともに設置された作業部会」で養護教諭の未来が十分検討されることを願うしだいです。作業部会の配布資料は学会HPにアップしていますのでご覧ください。

2024年度「研究助成金研究」の進捗状況

●養護教諭が心の健康問題を抱える児童生徒に対する支援において連携・協働を促進させる要因の検討

（第32回学術集会での発表演題：養護教諭が心に健康問題を抱える子ども支援において連携・協働を促進する要因の検討）

岩崎 和子（北海道教育大学）

2024年度の研究助成を受け、養護教諭が日常の養護実践において心の健康に関する連携・協働やチームワークで困難感を抱いていることや促進のために必要な要因について調査を実施することができました。本研究は2024年2月中旬から2010年3月中旬に「全国学校総覧

2024」に掲載されている北海道内の公立学校養護教諭300名を対象としてGoogleフォームによる調査を行いました。回収率は180人（60.0%）であり、有効回答者数は178人（有効解答率59.3%）でした。質問では「心の健康に関する連携やチームワーク形成で困っていること」「心の健康に関する連携や協働を促進させるために工夫していること」についてお聞きしています。質的記述的方法で分析した結果、「心の健康に関する連携やチームワーク形成で困っていること」として、【時間の不足】【チームアプローチの方法】【学校運営の問題】【家族理解と関わり】【地域特性】【性の問題】の6つのカテゴリーが抽出されました。

「心の健康に関する連携や協働を促進させるために工夫していること」については、【連携・協働力の活用】【学校側の環境づくり】【養護教諭の資質向上】の3つのカテゴリーが抽出されました。

本研究は第32回学術集会において研究の結果を報告させていただいており、論文として投稿する準備を進めています。最後になりましたが、アンケートに協力いただきました関係者の皆様、また、貴重な機会を与えていただいた日本養護教諭教育学会の学会員の皆様・理事の皆様に深く感謝申し上げます。

●子どもたちのWell-beingを高める学校の福祉的役割
－養護教諭の職務から見た現状と課題－

（第33回学術集会での発表演題：子どもたちのウェルビーイングを高める福祉的役割－養護教諭の職務から見た現状と課題－）

上原 美子（埼玉県立大学）
大川 尚子（京都女子大学）
髙田恵美子（畿央大学）

本研究は、公立小学校680校、中学校340校、高等学校180校、計1,200校の養護教諭を対象にWeb調査を実施しました。調査項目は、対象者の属性、学校の福祉的役割の理解、家庭支援の現状、相談経験、社会的養護の理解、ウェルビーイングを高める取組等の計31問と養護教諭の福祉的役割の自由記述1問です。回答数は232人、回収率19.3%、有効回答率は100%でした。対象者の属性等を独立変数として分析し、第33回学術集会で発表した概要を報告します。

相談経験については、高等学校の方が小学校より高く、高校生が抱える課題の複雑性や深刻性と養護教諭の相談対応が関連していること、小規模校の方が大規模校よりも高く、児童生徒との距離の近さが関連していることが推察されました。また、学校の福祉的役割の理解については、50代が他の年代より高く、養護教諭経験の蓄積が理解の深化に寄与する可能性が示されましたが、相談経験やウェルビーイングを高める取組は、年代による差が認められませんでした。ウェルビーイングを高める取組については、学校の福祉的役割に対する理解高群、相談経験有群の方が低群、無群より高く、理解が取組の質や量に影響を与え、相談経験が養護教諭の取組を促進する要因となっていると推察されました。理論と実践をつなぐ支援体制や研修を工夫し、学校の福祉的役割に関する養護教諭の専門性を高めることで子どもへの効果的な支援が期待できると考えます。今後、論文作成に取り組む予定です。

●養護教諭養成担当教員の育成プログラムの開発

外山 恵子（名古屋葵大学中学校・高等学校）
井澤 昌子（名古屋学芸大学）
後藤ひとみ（前愛知教育大学）

2023年11月の理事会で研究助成金研究に選定されてから約2年が経過しましたので、昨年12月に京都女子大学で開催された第33回学術集会の2日目に報告させていただきました。

本研究は、わが国の教員養成の特色である「開放制」によって多様な養成機関が存在する現状から養護教諭養成の質の担保を課題と捉え、優れた養護教諭を輩出するためには養護教諭養成に長けた大学教員が不可欠であることから、これまで教員個人の自己研鑽に任されてきた大学教員となる道筋を整理し、養護教諭養成担当教員の育成プログラムの開発を目指すことを目的としています。調査対象は、養護教諭養成を担ってきた養護教諭経験を有する大学教員6名で、半構造化面接にて「養護教諭の経験」「大学教員になった理由」「大学教員になって困ったこと」「大学院の学びの活用」などを聴取しました。聴取内容から逐語録を作成し、SCAT（Step for Coding and Theorization）による分析を行っていますが、今回は「大学教員になった理由」の分析結果を報告しました。

大学教員になるまでの道筋は3つの系にまとめられ、大学卒業後に大学院へ直進してから養護教諭になるか、養護教諭を経験してから大学院に進学するかの選択が捉えられました。また、SCATによる理論構築から、大学教員になった理由として、①転職の必要性、②転職のきっかけ、③転職による自己実現、④養護教諭養成への期待が捉えられました。今後は、他の聴取内容の分析を加えて、養護教諭経験者が養成教育の担い手として育つ過程を整理し、育成プログラムの具体化に挑戦してまいります。

「養護学の構築にむけたプロジェクト」(報告)

代表　徳山美智子(元大阪女子短期大学)

本プロジェクト第二次事業(2024年度)では、「養護学」固有の特性の明確化にむけて学問体系の整理を継続し、独自性を捉える視点の深化に取り組みました。また、2回の研修会を開催し、学問的視座と実践知の双方から「養護学」構築への認識を深めました。本稿では紙幅の都合により、研究成果の要点を述べます。

■ワーキンググループ1では、「養護学」の学問体系を整理しました。大学教育の分野別質保証に関する参照基準を踏まえ、学問体系は主要な概念、固有の視点、主要なアプローチ等から説明できるものと仮定しました。「養護学」に関する12編の記述内容から、「養護学」は「固有の人権・権利をもつ子どもの自己形成をめざして、目的を持って意図的に働きかける教育活動であり、状況に応じた教育的ケアとしての健康支援・生活支援・発達支援を通して展開される養護教諭の実践を支える独自の理論を研究する学際的領域(以下略)」と説明できる可能性が示唆されました。

■ワーキンググループ2では、養護教諭の実践・専門性に関する研究をスコーピングレビューにより概観し、「養護学」を捉える視点を抽出しました。医学中央雑誌Web版およびCiNii Researchから基準に沿って文献を選定し、10編を分析対象としました。分析の結果、発達支援と教育的機能の統合、全人的理解、多層的支援、経験に基づく感性、保健室の独自性など9つの視点が導出され、養護教諭の実践に内在する専門性の構造が明らかになりました。これらは、発達的視点や経験知の重要性を示し、「養護学」の理論化にむけた示唆を与えるものでした。今後は、心理・社会・経済・福祉を統合的に捉える視点の不足や実践知の理論的深化が課題となります。

■第二次の研究成果は、第33回学術集会で報告しており、本学会誌第29巻第2号に掲載を予定しています。会員各位よりご意見を頂けましたら幸いです。

理事会の議事について(報告)

総務担当常任理事　塚原加寿子

ここには第6回の審議事項のみを掲載しました。議事録の詳細は、学会誌第29巻第2号(2026年3月末発刊予定)に掲載いたします。

<2024年度第6回理事会>

1. 日　時：2025年11月26日(水)19:00～21:25
2. 場　所：Webシステムにて開催
3. 出席者：理事 15名(欠席1名)、監事2名

1)「第5回理事会で承認した「代議員及び役員候補者の選出に関する規程」の改正箇所の表記修正について
2)「役員旅費規程」の一部改正について
3)「日本養護教諭教育学会誌 投稿規程」の一部改正について
4) 2024年度事業報告(案)について
5) 2024年度決算報告(案)について
6) 2024年度の委員会活動報告(案)について
7) 2025年度事業計画(案)について
8) 2025年度予算(案)について
9) 第5回(2025年度)定時総会(代議員総会)関係
10) 理事の再任及び監事の選任手続きについて
11) プレコングレスの事後アンケート等について

事務局からのお知らせ

総務担当理事・事務局長　加藤 晃子

会員の皆様には、平素より学会運営にご理解とご協力を賜り深く感謝いたしております。

●年会費の納入をお願いいたします。

2025年度の会計期間は2025年10月1日から2026年9月30日までです。すでに、会員の皆様には年会費振込票をお送りしていますので、速やかに納入をお願いいたします。

●メール登録をお願いします。

オンライン研修会等の開催連絡をはじめ、タイムリーな情報提供のためにメールアドレスが必要です。未登録の方は、至急、右のQRコードまたは学会HPからお知らせください。

●『養護教諭の専門領域に関する用語の解説集＜第三版＞』の残部が僅少になりました。

販売できる冊数は40部程度になりました。冊子をご希望の方は右のQRコードまたは学会HPのフォームにて早急にお申し込みください。

●既刊学会誌を学会HPに掲載します。

まもなく第29巻第2号を発刊(3月末予定)しますので、4月以降に第28巻第1号・第2号をアップします。J-stageへの公表作業は随時進めてまいります。

編集後記

今回は、学術集会の振り返りと次回の案内、助成金研究の報告、トピックス、会員交流、プロジェクトの報告等盛りだくさんです。ぜひご活用ください。また次回はいよいよ100号となります。記念となる号にしたいと思います。

(荒川雅子・山本訓子)